



一貫コース通信

良き習慣はそのヒトの第二の才能である

薫風がそよぐこの週末に一貫全体行事の“強歩”が実施される。非日常性を教育プログラムに組み込む一貫ならではの取り組みの一つである。眼目は心の逞しさの強化だが、合わせて中学生は縦割りグループでの先輩後輩の相互親睦を図る狙いも含まれる。これを機に、後輩諸君には先輩の実力に裏打ちされた力強さ・優しさを実感して貰えれば嬉しく思う。ところで、自分の歩行能力は如何程のものか？ 文明が進歩し日常生活が随分と便利になった。実際の所、長く歩く必要自体が随分と少なくなった。私が小中学生だった頃は、学校行事に“遠足”が在ったが、単なる遊びではなく名目通り日常では中々歩かない長距離を歩く機会でも在った。歩ける距離を試す機会もない今日、こんな事は考えもしないだろうが、発想次第で新たな習慣創りができ、“こころ”も強くできるのだ。

少々わき道に逸れるが…、それにしても松陰(吉田松陰)は歩いた。萩から青森まで脱藩までして、ほぼ本州を縦断したと言って良い。時に人を訪ね真理を求めて生涯に歩いた距離は約1万2千キロに及ぶと言う。また、旺盛な好奇心は国外までに及び、ご法度の密航を企て“安政の大獄”で刑死に至る道程をひたすら歩いた。思うに、歩く事で、思考し、そして深めた。又、求め訪ねたヒトとの出会いが自己の考えに確信を与えたが、言わば、彼の29年の生涯はそれに費やされたと言って過言ではない。その松陰が幼少の頃、杉家の伯父に当たる玉木文之進に鍛えられている。一つひとつの所業が利己的か、はたまた利他的なのかを問われ、事が前者なら悉(ことごと)く打ち据えられたと言う。この躰(しつけ)が松陰を決定付けた。言わば彼の最大の魅力は自分に対する徹底的な厳しさだが、その所以である。

私の経験ではヒトの才能≒能力は、飽くまでも結果論で在る場合が多い。また、才能は着き詰める所、そのヒトの習慣に因る所が絶大である。ヒトは誰も皆初めから能力が備わって生まれて来る訳がないので、ヒトの能力は飽くまでも努力で得た後天的結果で在るのは明白だ。それでは、能力を創る習慣はと言うと、この事が以外に難しい。何故なら毎日ただ漫然と繰り返して行って居ても、決して良い習慣にはならないからだ。良い習慣は一定の負荷を自力で乗り越え、結果的に意識しなくても出来るようになった後天的能力の事であるからだ。然るに、松陰が文之進から受けた様な、大きな負荷(ある意味厳しさの伴う)がないと正直身につかない。人の幼少期(若年齢期)の厳しい躰の意義はここに在る。

松陰はヒトに会う事を目的に歩くことを是とした。当時は郵便も無く、今のネット社会の様に情報を簡単に交わす術(すべ)がなかったからである。しかし、歩く事が苦や重荷でなかった理由は、それ自体が能動的でしかも利他的だったからである。これは、飽くまでも推測の域を出ないが、もし現在に生きていても、その人に会う為に実際に出掛けて行ったに違いない。何故なら、それが松陰自身の習慣だと思うからである。

